

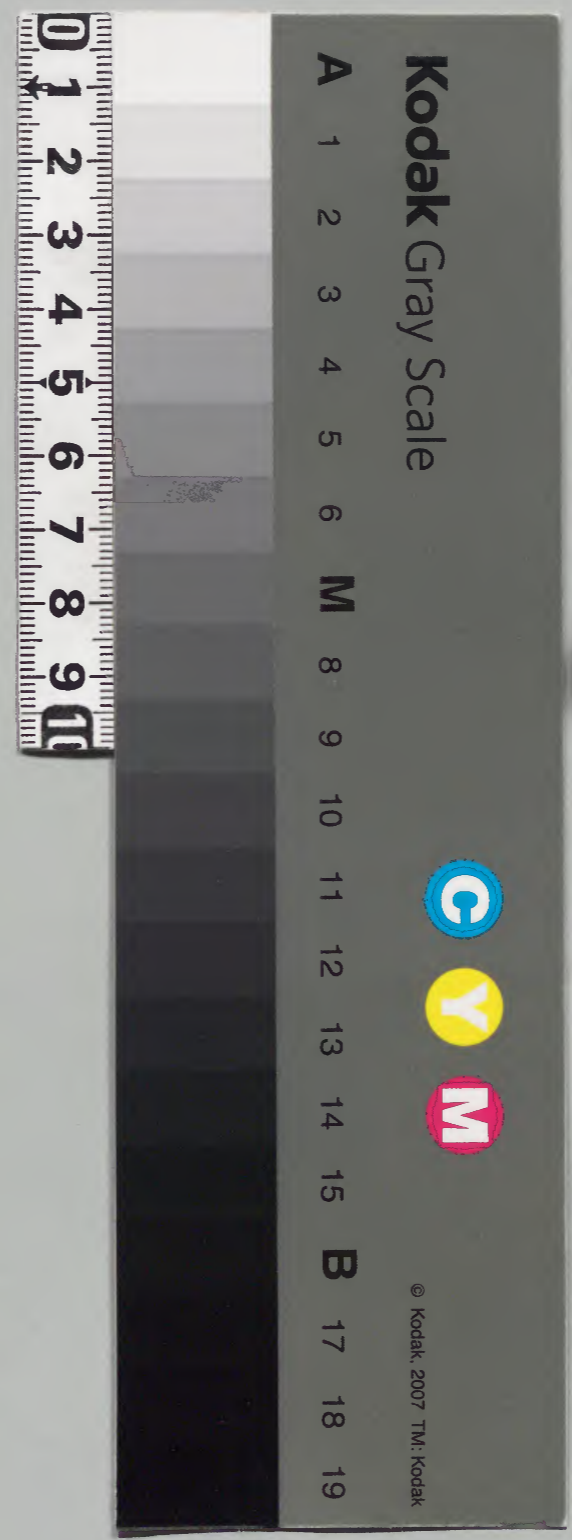
日本書紀傳 廿八卷下

和書
一〇五二二號

九十二

内閣文庫		
番號	和	10522
冊數	156	(101)
函號	特 85	1

内一五六五號



須多杯披此云磨紀

此然後と云事を右の御事共を訖させ御在り坐ける
より續けて直小其後に見てハ大小心得誤る事ナク
るずるむ有ける然るハ上件向ハ一も素戔嗚大神の
謂ゆる初度小天降り御在り坐ける間の御事やして
彼敷川よりハ夏小以前の御事ありきりハ然るハ此
御政ハ一も吾兒所御之國と詔給へるが如く高天原
より逐ハれて天降り御在り坐りて彼鮮除の驗
小依り始りハ甚勝りて直く正りき大神と成り

せさせ御在り坐けられ唯其天神御子の御爲の所
思ひて万小許太の御功をさむ立させ御在り坐ける
を此小於て其御功と一も千名の五百名小負持せさ
せ御在り坐て愈其根國御在り坐り給せ給ハ
心と所思あり成て即天上小實の御辞見の御爲小再
天上小参上らせ御在り坐けり即上章第三一書小是
後素戔嗚尊曰諸神逐我我今當永去如何不與我相
見而擅自徑去歟迺復扇天扇國上詣于天時天鈿女見
之而告言於日神也略於是素戔嗚尊白日神日吾所以
更昇來者衆神處我以根國今當就去若不與我相見終

不能忍離故實以清心復上來耳今則奉觀已訖當隨衆
神之意自此永歸根國矣^請如照臨天國自可平安且吾以
清心所生兒等亦奉於此已而復還降焉有是是あり
然定めて云所以如何なる其時の神逐の所
乃共逐降去于時霖也素受鳴尊結束青草以爲笠蓑而
乞宿於衆神之有也此第四一書小降於新羅國
居曾尸茂梨之處と見えたる引合を以て此大
八洲國の木種を分布給へり初御在坐ける
知れりける此時紀伊國小初御在坐ける
程の御事あり其由后神高稻田姫命御兒大己
貴神もども未御在坐を以前有る故小出雲國の
事とて一旦も見えざるを以て其前後有る事を知
べし但右の一書小五男三女神の生坐し事を此度の
事と爲る甚し^{事論}を待たる御心
ハ其御功を千名の五百名小負持して清明御心の
程と明く申奉らせ給へり終根國小罷り御在坐
出御辭見を申させ給へり外無くるも有けり

尔時小彼三女神をも伴ふさせ御在坐して出雲國小
天降り御在坐り予常小後の御天降と云は是か
り即此第一一書小是時素受鳴尊下到於安藝國可愛
之川上也と有る是と云あり正書小是時素受鳴尊自
天而降到於出雲國敷之川上と有る其より遷行坐て
彼八岐大蛇を退治させ御在坐ける地を云るり即
上小乃拔鬚鬣散之即成杉又拔散胸毛是成捨尻毛是
拔眉毛是成據樟略申夫須敷八十木種皆能播生も有る
此程ハ悉く小凡て大八洲國內ハ青山と成りり見
えて彼大蛇の事と正書小松柏生於皆上と書これ古

事記ふも亦其身生蘿及檜楡と有る許り世小遍ねく
生弘びりて然も大樹の状ありけるあり又第二ノ一書
小ハ汝可以衆菓釀酒ハ甕と見えたる此を以て也其
嗽ふ可き八十木種の世小廣く行亘れるを見り可し
右等ハ何れも此大神の御身より化れる物あり又天
上より將下りせ給へる者あり又此大神の始て國土
小分布りし生し立させ給へる物あり此時小初て
出雲國小天降り御在し坐と爲る如何も御暇の御
在し坐て然物爲りせ給へりと爲む若其時小御毛を
拔散らせ御在し坐て樹共を生し給へるも山の

限を盡し青山と成り竟て後小大蛇の背生小迄小生
り程あり幾千万年とや此敷川上よて給へると爲む
又此大神の然も木共と此小初て生し立給へるを知
るも其足脚摩乳手摩乳神の珍奇くしげ小語り
申す可き小非りとるむ明くめ曉る可なりける然也
初て天降り御在し坐て其五十猛神以下の三神を帥
し木種と此小分布りし給へり又其次小辞見の
御爲小天上小參拜し御在し坐て出雲國小天降り
も知れり若て其脚摩乳手摩乳神の爲小八岐大
蛇を退治させ給ひ終ふ其尾を斬屠し此小彼草薙劔
を得させ御在し坐し正書小謂ゆる素戔嗚尊曰

是神劍也吾何敢私以安子乃上獻於天神也之有る此
ハ上章第三一書小所見なる辭見の御言小吾以清心
所生兒等亦奉於岫之申させ給へり其表物を奉らせ
給へりして天神御子として天降して天下を所知坐
しめ奉らせ給へり御靈實是あり若て其二神の女奇
稲田姬命を娶させ給ふ可き事の運びハ神隨が
て至りけり正書ハ然後行覓將婚之處遂に出雲之
清地焉乃言曰吾心清清之於彼處建宮乃相與道合而
生兒大己貴神因勅之曰吾兒宮首者即脚摩乳手摩乳
也故賜号於二神曰稲田宮主神之見えたる是なり此

小至りて國土經營の大業を其大己貴神附與給
はしめて御母奇稲田姬命託其清宮生長
し奉らせ給へり其傳ハ脚摩乳手摩乳神と稲田宮
主神之事任し給へり然れども右小續已而素
彥鳴尊遂就於根國矣之有れども此ハ其間御事と
ハ悉小漏し傳へりれども其間ハ猶餘多の御事
業ハ御在し坐へりける此よりして素彥鳴大神
邦を建らせ御在し坐し初たり出雲風土記小謂ゆる
國引の御故事ハ正ハ此程の御事業よて渡らせ
給ふ可き由傳二十三二百九注丁明く奉る如

但此大八洲國より事始て外蕃諸部の裔國迄を也
餘さず建させ御在り坐す御事あり有はれ此より
遙ふ後ふ彼熊成峰ふ御在り坐す根國底國ふ到りせ
御在り坐す迄の間ふ專要と功績に給へる御本業
みて渡りせ給へる此ハ此大神の此顯國ふ御在り
坐り限りハ惣てふ直り御事ありけり若て其御長
子五十猛命と韓國伊太氏神と申奉れり此大神ふ
從奉りせ給ひて共ふ其御功とあり建させ御在り
坐り御趣ふハ聞えたる此程ハ大己貴神ハ別
未如く御在り坐す清宮ハ
傳りて御在り坐す間の御事ありけり彼八十神
の事故ふ遇給へり此間ふ有し事と知べし

此國引坐ハ東水臣津野命即素戔嗚大神ふ渡り
せ給へる由ハ予大明ふ所有て傳二十四卷ハ
大國主神と此大神の六世孫と云ふ
僻事をしも悉く正したる説あり次ハ古事記ハ
此大神の又更大山津見神之女名神大市此賣生子太
年神次宇迦之御魂神云々有は此外ハ諸の御子
神等と生奉りせ給へる事傳二十三二百九
十九丁粗注ハ
奉れり其二十六六十
六丁ふ悉くハ明り注ハ奉れ
る是あり然して此稻穀神を生奉りせ給へる所以ハ
上ハ夫須取八十木種皆能播生と有り第一書ハ以
衆菓釀酒ハ瓊有る如くして此大神の邦を建させ
御在り坐り以前ハ本實を以て糧ふ充たる程の事

ふして古事記ある肥河上ふ御天降の所ふ此時著從
其河流下於是須佐之男命以為入有其河上而尋覓上
往者老夫與老女二人在之有が如く本より穀種も有
り火食の事も有之雖も其の猶甚稀の事あり有け
ば此ふ於て其稻穀神を生しめて國土ふ幸ハハ給
はむと所思して物爲とせ給へるよて先ふ四神出
生章第十二一書ふ所見たるが如く保食神の御爲ふ
甚無狀く御在し坐けり延て天上ふて天照太
神の始て其保食神の御身より成出たり一穀物と殖
生し立りせ給へりふ轉有る迄は妨し損ふ也給へり

此即謂ゆる天津罪是なり然るを此大神天上より天
降り御在し坐けり後ふ天照太神の夫御心を御心
に於て其保食神の御功業を資け天下蒼生ふ專衣食
住の事を幸坐むと爲とせ給ふのふ深く遠く功勞
りし御在し坐けり此稻穀の事ふ就ては保食神ハ
其御靈神ふこふ渡りせ給へりけれ其種蒔き陪養
ふ事ハも別ふ其神の御在し坐て物爲とせ給ふふ
非ざしてハ如何てハ成出來り此即大年神以下
の御子神等を生奉りしめ給へり所縁ありける委し
を別て云時ハ其保食神より成出たり衣食住の物實
ふ就て五十猛命等の三神ハ家宅の事を主り給ふ此

大年神宇迦之御魂神等ハ食物の事ハ御靈を幸給ひ
又衣服の事ハ上十二ノ云リガ如ク右ノ三神己ハ
天ノ上ニ桑麻等々も合せて分布シ給ヘリと猶青
幡草日古命ノ麻を蔭種給ひ又大己貴少彦名神を
高麻神ニ申シ彼胸肩ハ御在リ坐テ三女神を織
幡神とモハ幡神とモ申相機姫神とモ申奉々類是
リ然リ此大神ハ上十六丁又九ノ注セリガ如ク
先ハ天降り御在リ坐一時ノ宮都ハ其五十猛神以
下三神と帥ニ紀伊國ハ御在リ坐リ此度ノ御天
降以來出雲國清宮ハ奇稻田姬命と共ハ御在リ坐テ
御兒大己貴神と令生給ヘリ後ハ其御子兒神を生
立を試させ給ハシ爲ハ其清宮を引モ讓リ聞元世
給ヒテ御自ハ猶紀伊國ハ御在リ坐テ方状アリケリ

其天上ノ御魂等ハ天降坐ハ三女神をモ此ハ伴ハセ
御在リ坐テ共ハ紀伊國ハ遣ハ御在リ坐テ所と云證
ハ傳二十三三百二十四四百六丁ハ己ハ委曲ハ辨ハタリ
ガ如ク古事記八十神段ハ大穴牟遲命神其兄弟八十
神ノ爲ハ甚ハ害メ事ハ世給ヘリ時ハ御祖命ハ御
心トシテ汝有此間者遂爲八十神所滅乃速遣於本國
之大屋毘古神之御所ト有リ御祖命ハ奇稻田姬命ハ
御在リ坐リ大屋毘古神ハ即五十猛命ハ御事ハ
上ノ一書ハ即紀伊國所坐大神是也ト見え此ハ此
三神亦能分布木種即奉渡於紀伊國也ト有リ是ガリ

其次小御祖命告子云可參向須佐能男命所坐之根堅
洲國必其大神議也故隨詔命而參到須佐之男命之御
所者其女須勢理毘賣出見爲目合而相婚見えたる
根堅洲國疑不可其木國小御在坐御兄五十
猛命の御許に遣りて其神の御議を以て御父大
神の御所を奉りて其御所置を任せ奉りし御事
あり然して此小渡りせ給へる須世理毘賣命の御
謂ゆる三女神の御事あり己小瑞珠盟約章第一の
書に汝三神宜降居道中奉助天孫而爲天孫所祭也
有る如く甚く止事無き所以有て天降り給へる御神

小御心渡りせ給へりけぬバ縦や此大神根堅洲國
小御在坐も此三女神を帥て行赴りせ給ふ可
き非ず然りと其大神の御所小此三女神の御在
坐と云へ未其國小赴給はざる以前ありし一の證ふ
り又彼天上より天降り御在坐て以來謂ゆる國引
坐神と稱奉り又建邦之神とも稱申せりが如く國土
經營の御事を始りせ御在坐おかり其御事業をバ
未大國主神小授け聞えさせ給はざる其半途より根
國小就坐と云事ハ且し御在坐より御事あり
是其二證ふり偕其三女神の御事小就し其由縁を求

多小神名式小紀伊國名草郡志磨神社名神御在一坐
 と和名抄郷名小同郡島神戸と云有れば少縁の御事
 とハ所見ざり小傳十五二百二小注せるが如く社説
 小祭神中津島姫命相殿生國魂命と云其其大國主
 神の御事ふて渡りせ給へれば右小目合相婚と有
 奇御戸ありけしを後小筑紫小本宮定身とせ御在
 坐る御霊を勸請せる以て志磨神社とハ稱申せるを
 めり又式小同郡朝棟神社此此同小若山の邊ふて其
 間合甚近と社説小祭神一座大己貴命あり御祖命
 大己貴命と助け活けて此本國ふる大屋昆吉神御

許ふ令逃給へり故當時此地小逃來給ひ一小天色猶
 明渡りて物色とハ辨へされば即此地を指し朝暗と
 ハ号給ふと云ひ其末社小八雲神中津奥神と云有也
 後の事あり其由て來り所有べくして甚床しけれ
 ば此等と以ても此傳小根堅洲國と云ひ黄泉北良坂
 と云るハ行越たる誤ある事著明なる有ける右の
 神ハ素戔嗚大神小御在一坐べく中津奥神と申すハ
 右の中津島姫命小坐り奥ハ俗小士人の妻と奥と
 云ふ等しくて其后神の謂ふる可一若て當郡須佐神
 戸有り式小在田郡須佐神社名神大月次新嘗と有
 是即其大神の御座所あるが其始芳野郡西川奈小御
 在一坐りけり由るが其小一大和志小載た相吉
 野郡式外一宗像神祠在坪内村天川莊二十一村其
 祀正殿拜殿御厨所十二小祠西箇怪石三所清泉城内

有寺云祝部十家專幹神事之有也世小名高天
川辨財天小謂ゆら金奈山の境内に御在り坐り此
殊小山深く絶境あるが神代の神迹ふと云ふ也
思ふ任小事の因ふ云ふり必由有けり事聞ふ所
然して其大穴年逢神とて甚く嘗て試みせ給へ
り御事ふと思ひ四度ふりける一知即喚入而令
寢其蛇室之有る是あり二り亦來日夜者入吳公喚
降室之有る是あり三り亦鳴鑼射入其大野之中令
採其矢故入其野時即以火迴燒其野之有る是あり四
り率入家而喚入公田間大室而令取其頭之虱亦見
其頭者吳公多在之有る是あり然ふ其後神亦助
依り右御害の共の甚辛くも悉く得堪へ給へ

り行れ實は國主神と御在り坐る大器あり事
心所知者今迄の御心一時に聞けさせ御在り坐り
於心思愛而寢之有る是あり故其大神の御寢坐
り間小其後神を負給ひ即其大神の生大刀を生り天
と天沼琴をとて取持して逃さし給へ御在り坐りける
天沼琴樹小觸し地鳴動きなり大神の聞驚り御
在り坐り追至り給へりけり己に逃延給ひしけ
り其故遙小望り御在り坐り呼謂大穴年逢神曰其汝
所持之生大刀生り天以而汝庶兄者追伏坂之御尾
亦追撥河之瀬而意禮為大國主神亦為宇都志國玉神

此時若夫大神の
實小根國小御在
坐せし小其入
御在坐けり雲
給へり物爲り
給へり何小
し珠更に紀伊
入せ御在坐せ
此の事也

而其我之女須世理毘賣爲嫡妻而於宇迦能山之山本
於底津石根宮柱布乃斯理於高天原冰椽多迦斯理而
居是奴也詔給へり此即大神の御大業也此大元年
遷神小讓り聞えりせ御在坐せり此御事任の
御事を竟り給へり此根國小就り赴りせ御在
坐せり非ざる有けり但此時直小云せ給
ふと見ゆ然り可なり
給へりハ出雲國此ハ紀伊國の御事あり根國小入せ
其國小飯り御在坐せり此を以て右小根堅洲
國と云い黄泉比良坂百子傳の誤りと云あり
偕此の熊成峯と口訣小在出雲國と云り然り説小
其より後小出雲國小遷位せ御在坐せり天下の事と云貴神小讓り聞えり給へり
即根國小赴りせ給へり此國小内り物爲りせ御

在才坐けり出雲風土記佐那郡須佐鄉郡家正西二十
九里神須佐能袁命詔此國者雖小國ニ處在故我御名
者非著木石詔而即已命之御靈鎮置給之處然即大須
佐田小須佐田定給故云須佐即有正倉と有り此六大
神の根國小罷りせ御在坐せ就て其御名を御田小
負せて号け置せ給ひ又此小御靈を留めり御在
坐て其地小須佐の名を傳へり給へり由あり神
名式小須佐神社有り是あり此御事傳二十三三百十
三丁
小己小注せり又同記小島根郡朝酌郷郡家正南一
十里八十四步熊野大神命詔朝御籙勤養夕御籙勤養

△朝酌上社同下社
等下社と伊弉册
熊野大神にともなふ
ハシ

五贄組之處定給故云朝酌見元此熊野大神命
ハハ此素戔嗚大神の根國小赴り世御在坐伊時
其幽宮を此小定め世御在坐鎮り給ふ御名を
称奉れり（ろふ）其熊野神宮の御為御贄を奉給
ふ處を定め世御在坐けり此其根國小御
在坐しと爲させ給へり御定ありけし事申付も更
あり同部未記社の中ハ二百八十七丁小引り同記小意宇郡出雲神
戸郡家南西二里廿歩伊弉奈枳乃麻奈子坐熊野加武
呂乃命五百津鉏神鉏所取三而所造天下大穴持命二
所大神等依奉故云神戸他郡等神と所見たも此御
戸且如之

時の御事此二所大神と有ハ其熊野加武呂乃命
の熊野神宮の御料大己貴神の宇迦山本宮の御料
と此小充させ給へり若し其五百津鉏神
鉏所取三而所造天下大神穴持命の御右小引り
古事記小意禮為大國主神亦為宇都志國玉神と詔給
入り其表物を後小事依一授させ給へり先
より其八十神と言向させ給ふ御事あり故小生大刀
生弓矢の御賜物あり御在坐けり此小至りハ
全く根國小赴り給ふ所ありを以て其國引坐カ始
り用ひさせ御在坐來り五百津神鉏を盡くハ

授依川給ひて國土經營の御事を令成給へり者あり
 右の文の五百津神鈕所取而所造天下の續く文意
 を考へて唯其神戸の神田と依奉り事と此の別を
 る事と知べきあり諸其神鈕の國土經營の御事不於
 入甚止事無き其一二を云ひ同記國引文の八雲
 立出雲國者狹布之稚國在哉初國小所作故將作縫詔
 而栴衾志羅紀乃三埜英國之餘有耶見者國之餘有
 詔而童女胸鈕所取而大魚之支太衝別而波多須三岐
 穗振別而略と有は是あり又大己貴神の長子を味耜
 高彥根神と申奉り味耜稱辭あり耜此の神鈕も同

小くして御父大己貴神の御功業を受持たせ御在り
 坐て天下を經營せ給ふ由あり然る時ハ此の熊野
 大神より其大穴持神ハ此の五百津神鈕と事依り授奉
 りせ給へりあり實ふ所以有り御事ありけり古史纂
 段微ハ此文と引て熊野加武呂乃命ハ大穴持女彥
 名ニ神ハ事依り奉りけり由ハ云ハハ恐ハハ強説ハ
 尊の神宮ハ熊野大神の根國ハ就去ハハ神ハ己
 を寄せ給へり神戸を寄せ又御子大己貴神ハ神戸
 の官未官知社共ハ合せて三百九十九所御在り坐り
 中ハ唯熊野大社栴葉大社二所の出来給へり大
 是と云ふ然して大彥名神の出来給へり大
 己貴神の國土經營の事ハ有ハハ御事ハ大
 國ハ赴りて御在り坐り其以前ハ然ハハ御事ハ有ハハ根
 也非ずあり有けり信ハハ御靈ハハ假ハハ現身と顯ハハ出
 ハ後ハ熊野神宮ハ坐り御靈ハハ假ハハ現身と顯ハハ出

山猶傳十九卷二百五
五十七卷

給ひし其ニ神ヲ授け給へりと云ひ然れども出雲
神戶云事少彦名命ハ次り由無事少彦名也
○熊成峰峯一本和近那理能美多氣訓れども記傳
十二十熊成峰峯即熊野可可那頰と切ひ
奴あり此を和近那理と訓て鰐洲山の事と爲り非
ありと云れども實不然訓れども此小居熊成峯云
ハ此大神の御座所を神神而入於根國者矣而字ハ
而後の義ありければ其熊成峯より直小根國の御在
小坐り由非と事を先明く可可此を自熊野峯の
意小見りり右。和近那理の如き僻訓ハ出來れり
あり此居字ハ上の二書小居曾戶茂梨之處乃興言曰

此地吾不欲居と有る居不同トト上上麻志麻須と訓
て即居住の義あり即寶鏡開始章小居齋服殿其第二
一書小迺居ニシテス于天石窟此第六一書小吾欲住於日本國
之三諸山故即營宮彼處使就而居ニシテスると有ると思ふ可可
猶紀中中小居字を其例例を用ひり所敷知知多り
と今ハ一二と擧るり又斯斯所所在字と坐
字と書故此居熊成峯ハ出雲風土記意字郡熊野山郡家
正南一十八里と有る細書小有檜檜也所謂熊野大神
之社坐と有る是あり即神名式式謂ゆる意字郡熊野
坐神社大神の御事事由傳二十三三百十委委
明く注し奉り如し借熊成成の熊熊ハハ借字中

天孫降臨章小隈此云矩磨泥と有る隈字の儀あり同
記小飯石郡熊谷郷郡家東北廿六里古老傳曰云久志
伊奈太美等與麻奴良比賣命任身及將產時求處生之
尔時到此處詔甚久二麻志根谷在故云熊谷也と有
也隈ハ一義あり海宮遊行章筭四一書小雖隔八重
之隈と有ハ遠き境と云ハ仁徳天皇三十年御紀歌皇太后御
箇波區葦垣と有と和釋也小河隈也と有り又天皇御
歌小箇破能區葦愚葦と云御句有と釋小河之隈也
と注其六十二年小有大樹自大井川流之停于河曲
と見元齋明天皇三年御紀小薩麻之曲竹島之門と有

ふと曲字と久麻訓り地名小熊野熊襲と更あり
景行天皇十八年御紀小熊縣仁徳天皇十二年御紀山背
栗隈縣雄略天皇十三年御紀小播磨國御井隈欽明天
皇四年御紀小肅慎隈ふと斯と類外ふと多く有り万
葉一十三小山際伊隱萬代道隈伊積流萬代尔又十五
隈毛不落思下叙來其山道乎又二十川隈之八十阿不
落二十五小道之河回尔標結吾勢又十九此道之乃八
十隈每又二十宮出毛爲鹿作日之隅回乎五十八十五
梓乃道乃又麻尾尔六十八小許伎多武流浦之盡往隱
島乃埜二隅毛不置十三七小道前八十阿每二十二十

小毛母久麻能美知波紀尔志字入二十阿之可技能久
 麻乃尔多知互尔ど山乃も谷乃も海乃も河乃も道乃
 も垣乃も云乃も何乃もノボ四間ノボの意めて頭明乃も見元
 透乃難乃状乃もを云乃源氏幕本卷乃甚隈無けふ
 乃も床乃もと有を始て滞乃事無く能物言ひ通乃事
 小云乃も其音同乃事あり右の如く字ハ様ハ小書乃
中乃隈字ハ内説文乃水曲
 隩也注ハ尔雅乃水屋内爲隩屋外爲隈云乃事文
 前集乃曲注曰隩曰隈注ハ隩と云乃事文
 乃けり向乃字ハ釋名乃曲阜曰阿乃云乃又文選注乃阿
 曲也注ハ隩乃詩生于道周乃注乃周曲也乃有乃
 阿乃曲乃其意乃通乃用乃乃阿乃隅乃字乃自會
 小廉稜也注ハ又文選注乃云乃山曲也乃見乃儲乃
 群乃熊乃曲乃穴乃中乃棲乃乃曲乃儲乃久麻乃右乃如乃
 祢乃小乃右乃久麻乃異乃乃儲乃久麻乃右乃如乃

〇神功既小竟
 〇御在坐給
 〇其始乃志給

意あるが此小熊成と云ハ此大神向根國小御在十
 坐むと爲し頭現國小御靈を留めし給小宮殿を定め
 せ御在坐す謂し瑞珠盟約章小是後伊弉諾
 尊神功既畢靈運當遷是以構幽宮於淡路之洲寂然長
 隱者矣と有る幽宮と同一御趣ふて渡り給ひけり
 然らば記傳九四十十小久麻奴ハ隱野の義と説れ十ニ
 八小熊成と切らば久麻奴と成る由小注されたるを
 合せて思ふ此の熊成ハ實小隱成又隈成の義あり
 其現御身を幽成させ給へ意ありけりハ久麻
 奴と切りたる奴も山野の野と別なり那須の義

ある事云も更あり然れば四神出生章第五一書小伊
弉册尊の御事を故葬於紀伊國熊野之有馬村焉之有
も其次小土俗祭此神之魂者之有を以見り時ハ葬字
を加久志奉流と訓りも天御蔭日御蔭と隱し奉り
事ありて此ハ其地より現御身ありて黄泉入御在し
坐ける後ハ御魂を齋奉りて上件伊弉諾大神素
戔鳴尊等のハ御自ニ其幽宮を構りて給へりあり此
ハ其根國ハ入坐し後ハ其神宮を供奉りてありて其
自他の差別ハ有り物々事々意相等しとありて有け
れば此紀伊國の熊野も野と云へり地理ハ非れば其

も亦隱成又隈成の義ありけり又天孫降臨章ハ大己
貴神の隱給へり御事を今我當於百不足之八十隈將
隱去兵隈此云言訖遂隱と有り此と第一書ハ高皇
產靈尊の又汝應往天日隅宮者今當供造と見えたる
日隅ハ借字ゆりてヒリスミ借往の義ありて此ハ幽宮の義ハ
るも其八十隈と云ふ此の熊成の言ハ相異ありて
る由右ハ引り例共ハ考直し知べりあり又古事記
玉垣宮段ハ坐出雲之石石之曾宮葦原色許男大神と
有も其天日隅宮の御事ありけり石垣ハ伊曾久麻と
右ハ八十隈と五十隈とも云べり曾ハヒリスミ借又ハ退ヒリスミあり

の言と同しと思ふ必天日隅宮なる事灼然者
 あり此も頭世を去て幽冥小入給へるを以て此天日
 隅宮の御設御在り坐けり此も亦右の例共々異
 ありざるを以て此熊成峯に居る云ハ其遠き境に赴
 せ御在り坐しりて此小御靈と留め物爲りせ給
 へり幽宮なる事を明らめ奉り可き者ありり然
 ねバ彼奇御戸開と成り給へり以前須賀宮に此
 熊野神宮己小傳二十三二百七注せらる如く
 本より別なる事論を待ずる也記傳九卷四十二丁小
北一十九里一百八十步須賀小川源出郡家正南一十八里須賀山と
又意宇郡野代川源出郡家正南一十八里須賀山と

有る此須賀山も即右の大原郡なるを云あり須賀山
 ハ大原意宇二郡に亘りて其姫小在り諸意宇郡熊野
 山郡家正南一十八里所謂熊野大神之社坐り有る新
 れバ須賀山熊野山ハ相並べり處ありて共々郡家正
 南一十八里と有る熊野神宮即此須賀宮處なる
 可き故思ふ久麻野ハ熊野の義久麻野ハ熊野の都
 麻暮微の由あり可云れたら其久麻野ハ熊野の
 る説ハ上ゆも引て實小然り事あり須賀宮ハ熊野
 問の御屋小其最初の御事あり熊野神宮ハ根國
 小入坐しと爲り給へり際小至りて物爲りせ給へ
 事あり最後の御事あり此郡家西南一十八里小在
 正南一十八里熊野山北流東折入于海に有る此今大
 草川西と東小大庭川とも云る野代川ハ今志部川と云
 あり○於根國者矣ハ正書小遂就於根國國矣と見
 元たる是あり此御事己小傳十五三百十小注せらる

其ハ就字を書以て唯ハ幸行ハ趣有るを此ハ殊
更ハ入字を用ひて此ハ多ハ深ク心と著ハ所あり
ハ神出生章第六、一書ハ然後伊弉諾尊追伊弉册尊入
於黄泉ト有る入ハ等ト地下根底ハ在る謂ゆる黄
泉ハ物為トセ御在ハ坐ケテ御事を明ト此ハ者ハ
リケリ儲此入御在ハ坐ト其入所必有ベシ事ハ
リケリ此ハ居熊野峯遂入於根國者矣ト見元トハ
上ハ百二十ト注ルカ如ク熊野峯ハ大神ハ入坐ト爲
ハ以前ハ御在ハ坐ハ宮處ト其入坐トハ他處ト
有ると此ハ居字ト虚ト自又ハ從字の意ト見

ハ種ト怪ト説ト出来ト此ト居熊成峯ト
放リテ遂入ト字ト續キ見ト時ト其混雜ト甚ク明
ト事トありケルト白井宗因説ト出雲ト日御崎ト
辨慶ト住ト所ありケルト邊ト熊淵ト云ト有ト被ト西塔ト
ト訂ト云トハ自熊成峯ト遂入ト見ト設ト偽トありト人
啓蒙ト日御崎ト祭ト神ト上ト社ト八束ト水ト神ト名ト神ト記ト日ト八
握髮ト尊者ト素戔嗚尊ト別ト社ト也ト蓋ト八握髮ト生ト之ト縁ト兵ト相殿ト神
三座ト田ト心ト姬ト命ト湍津ト姬ト命ト市ト島ト姫ト命ト有ト下ト社ト天
照ト太ト神ト及ト五ト男ト神ト云ト此トハ傳ト二十ト三ト卷ト三ト百ト十ト二ト丁
ト注トセリト如ト風ト土ト記ト未ト官ト知ト社ト御前ト社ト有トハ后
神ト社ト謂トありト次ト同ト御崎ト社ト有ト出雲ト御崎ト山ト云ト
西ト下ト所謂ト所ト造ト天下ト大神ト之ト社ト坐ト也ト有ト此ト當ト力ト
其ト下ト社ト即ト大ト己ト貴ト神ト也ト宋ト迦ト之ト山ト本ト宮ト是ト也ト若ト
啓蒙トハ問ト當ト官ト有ト紋ト石ト者ト石ト面ト有ト柏ト葉ト如ト良ト工ト彫ト刻ト而ト雖
爲ト敷ト片ト其ト紋ト猶ト存ト也ト相ト傳ト称ト神ト紋ト是ト也ト否ト云ト按ト名ト神ト記ト出
雲ト國ト日ト崎ト山ト有ト柏ト葉ト紋ト形ト石ト神ト代ト昔ト平ト國ト而ト後ト登ト熊ト成ト峯

又飯石郡須佐神
社の山も此の
出た神物と爲
て人皆恐怖れ

爲禰葉占云吾欲往於禰葉之所正也遂隨風止於此地
故至今示其幽契之事有熊成峯本在熊野神
宮の御事ゆゑ其山本ありて禰葉の御占と爲り給へり
命の御在坐り所山本ありて大色貴神后神須勢理昆賣
留の置せ給へりありけり筑前國崇像三所の内邊
津宮の傍に其禰葉紋形石の出ると神石ありて爲
て是れ崇むる事也右の由來ありて由れりありと
此ハ唯事の故此大神の根國ハ入幸行功杭ハ決
出雲國の御埼山是なり然ハ上ハ居熊成峯有
ハ彼意宇郡熊野山の事ハ久麻奴ハ久麻那須の
切まらりて更ハ異論無物也又和述那理ハ訓
來りても古事記ハ後ハ其御埼山ハ鰐淵山也此
以テ強テ熊成の字ハ當たり物あり故ハ言ハ甚當

ふれども其地より入御在坐り傳ふと有り
以テ之の所爲ハ聞ゆれば中ハある賜物あり有けり風
土記ハ出雲御埼山郡家正北廿七里二百六十步高三
百六十丈周九十六里一百六十五步西下所謂所造天
下太神之社坐也略ハ有是今俗ハ鰐淵山と云ふて
東方宇賀郷より始りて梓築郷を中ハ西方ハ謂ゆ
ル日御埼山也終れりハ山の全体ハ其宇賀郷あり即
古事記ハ所見ハ宇迦能山是あり由傳二十三十二
ハ委ハ注せり如ハ若ハ同記ハ宇賀郷郡家正
北一十七里廿五步所造天下大神命讓坐神魂命御子

綾門日女命尔時女神不肯逃隱之時大神伺求給所是
則是郷故云宇賀即北海濱有磯名腦磯ナウシ高一丈許上生
松木芒至磯邑人之朝夕如往來又木枝人之如攀引自
磯西方有窟戸高廣各六尺許窟內有穴人不得入不知
深淺也夢至此磯窟之邊者必死故俗人自古至今號云
黃泉之坂黃泉之穴也之所見也此腦磯の窟戸あり
其入せ御在し坐ける穴あり可なり磯名を腦磯ナウシ
と云ふ此腦字ハ和名抄頭面類ハ腦和名奈豆岐と有
る言のまを借しるあり右の文意を以味ハふるハ
名畫の義ハ此ハ用ひたるあり此大神の天降り御

在し坐ける始より顯國小立させ御在し坐ける御功
業の行事此ハ畫で根國ハ入り御在し坐ける所以と
以て此ハ號けり事右の黃泉之坂黃泉之穴と云稱
小也思合す可し此ハ奈豆岐を終焉の義ハ取て説を
成すハ古事記日代宮段倭建命の崩
坐る所ハ爾貢上驛使於是坐倭后等及御子等諸下劍
而作御陵即爾貢廻其地之那豆岐田而突爲歌曰那豆
岐能多能伊那賀良迺伊那賀良尔波比毋登富呂布登
許呂豆良於是化ハ尋白智鳥翔天而向濱飛行と有り
那豆岐田ハ望田と云りとも思ゆれども其日本武尊
の御壽此ハ畫とせ御在し坐て後ハ其葬事ハ任奉る
地の田あり故ハ那豆岐田と云あり但其ハ崩坐
あり此ハ現身あり入坐るありと雖も其終を焉ハ
畫の義ハ以て此ハ諸此黃泉之穴の事ハ就て玉勝間
腦磯の名ハ有あり
山菅卷ハ云々小篠御野去し寛政六年三月の頃出雲

又風上記大前島
登瀛の關ハ腦島
生江茶々海濱有
松崎と云ハ此海中
在と以て名と同一
く爲らる可し

大社小詣たりし時鰐洲山近邊の山に黄泉の穴と云
が有り由己く聞らば如何あるゆゑと問たりしに此
邊も行見たり人無き由杵築人の云を聞て切し
行て見ま欲しく思ければ年老たれば足弱くて自
得物爲て骨子小齋藤秀満と云を率て物爲し然
汝行て見て來と云付て遣けし其間の事委し書記
したりけしと此も見せし遣せたりけし其有る様
先杵築より東鰐洲山を越て東北方海近き所川下村
と云を過て奥園村と云に至り彼黄泉の穴は此村の
山に在るり海邊より十八町登る所あり若て山は甚

しも高きゆゑ道甚嶮しく石交り草高き生茂り
新多くて甚し登り難し彼穴は中腹（中腹）草深き中に在
る僅し見えたり口は狭く下方八亘二尺四五
寸三尺許も有べし丸く井の狀にて底見えぬ周は口
より下皆積上たる如くあり石にて其石皆稜有る丸
く破目多く色は白く又黄くも交れり然るを
南方一方ハ廣く二尺許も長く一丈五六尺が程
枚ありと立ちし様あり一の大石にて此石の下狀
穴は北方へ曲りて見えたり穴は口近き所は石は
苔ふとも生たりと下方ハ甚く乾きて潤無く見ゆ此

亮里人ハ冥途の穴と云レ其邊の者も多クハ知ズ此
奥田村の者と導ル率ニ行タル年七十許有ル翁ハ
語けるハ此穴來レ見タル者ハ甚稀有リ年若クハ里
の者迄旦テ知ズトテ語りける始鰐洲寺ニ語るハ
來つる翁ハ年六十許有ル翁ニ若ウリテ程小來レ見タ
ル事ハ有リトテ許多の年經ルハ其登ル道も能モ
覺ズトテ又此奥田の翁をバ其ガ語ルハ來タル翁ガ
有ける又彼翁の云けるハ此穴より毒氣の升ル事有
ル觸ルハ必ス息絶ル有リト云傳ヘタルト云を聞
ク暫時現（見ル程）ルハ甚氣恐ルハ其能見ル飯テズハ

振延テ見ル來レ詮無クハ甚トテ念シテ猶能見ツ
カ翁ガ翁又語けるハ昔ハ此穴の内へ石を落テ入ル
ニハ其石下リ行任ル次ニ周ル石ハ觸行ク音暫時ハ
間遠ク聞え來レト四十年許彼方ハ或者の大なる石
一を落シ遣ル事有リ其後ハ石を落セども音久シク
聞えず成ぬルハ彼大石の半ハ滞リテ其ハ塞ルハ故
ル有リトテ語ける又昔鰐洲寺を始シ智證ト云僧此
穴ニ入定シつる由彼寺の縁起ハ見元たり（聞カドモ）トテ語
ル諸此山の凡テの名ハ奥田の山ト云テ其中ハ此穴
有ル近邊トバ雜賀谷ニ云ふ此山の後ハ鰐洲山ニ續

きて遠くもずと記したりけり。諸又風土記の宇賀郷の所は黄泉之穴と云所の見元なるは同郡の内は有れども磯邊にて窟の内は在る由ありは異所なる可し。様と有り故其奥國村なるは風土記の云らるは本より別あるが其腦磯の窟戸を鈿小在川下村西磯と云好は甚遠なりぬ所にて共は御埼山の裡面ありけり。然るは風土記の人不得入不知深淺也と書せは當昔にも見たる人の無き由あり。今は其窟戸の事だふ人の知ず成なるは神の御心として何時と無く幽り亡給へるをめり。其古事記の故其所謂黄

泉比良坂者今謂出雲國之伊賦夜坂也。見えたりは伊弉諾大神の出給へり。穴は其地は有るは唯神名式に謂ゆる意宇郡揖夜神社同社坐韓國存太氏神社御在坐のしりて風土記の項す其穴と云らるは何時の地下に隠れて見えず成ぬりて其即神の御心も事申すも更なる御事あり有る。何以下神の御心と云ふ齋明天皇五年御紀の狗窟置死人手臂於言屋社と有り。天子崩兆と云事有る果して翌年天皇崩御の御事有り此頃其穴は己の埋れし無りけり。然る著明き信驗有り又此腦磯ありは夢至此磯窟之邊者必死と云程の可畏き事有る故は年序を經り間は其窟戸あり所を隠し理り。憐愍給ひて人の知せず成り給へり。天下人民を憐愍給ふ神の御心は此に在る事あり。今ハ強小

此のむ其の跡を見出るあとの情進に決めて爲す
 者あり因云通證小今按熊訓和尔下一書作熊鯨是
 世云云然れども熊成久麻那須あり和逆那理と
 云其根國よ入給入り即後云云鯨淵山の地あり
 事を知て中古の人の推當たり一者あり若古然か
 りい小居御埼山より居御埼峰より書よ可き者
 あり猪此大神の志して其入立せ御在し坐け根國
 一も即此大地の胎内小在り謂ゆり黄泉國あり事
 申すも更あり其ハ四神出生章第六一書の吾欲從母
 於根國と有と其御母神の御事ハ右の上文小然後伊
 弉諾尊追伊弉册尊入於黄泉と見えたる即曲穴の中
 を潛り入給入り證是あり然れ其追及て幸行り
 御父大神逃還り給ふ所小伊弉諾尊已至泉津平

坂故使以千人所引磐石塞其坂路を所見たる即其黄
 泉の穴を塞ぎ埋給へりありけり此を以て根國底國
 と云ひ根堅洲國と云ひ此地胎小在り一城小して磐
 穴を經て入り處ありを知べきあり右ハ御紀の趣と
 撮て云所あり祝詞の傳説小於ても然り鎮火祭詞小
 國乃八十國島能八十島乎生給比八百万神等乎生給
 比麻奈芽子尔火結神生給比美保止被燒比石隱坐比
 夜七夜晝七日吾乎奈見給比曾吾奈妹命止申給比此七
 日尔不足比隱坐事奇止見所行須時云云吾名妹能命
 波上津國乎所知食倍吾波下津國乎所知止白比石隱

給氏與美津坂尔至坐氏所思食久云云之有此始小火神生給ひて被燒給へり其火熱ホトカ去世御在一坐て石隱れ御在一坐けを其妹神の見行ハ給へり小耻しひて終ふ其石隱の穴より穿りて與美津坂小至坐り趣あり此此頭國を上津國と云ハ對へて黄泉を下津國と云ハ此地胎小在り幽界カクリの狀あり灼然りけを其道饗祭詞ハ大八衢ハ湯津磐村之如久塞坐皇神等之前尔申久云云根國底國與鹿備備來物尔相率相口會事無氏下行者下乎守理上往者上乎守理夜之守日之守尔守奉齋奉止礼之有ハ

四神出生章第六一書ハ其於泉津平坂所塞磐石是謂泉門塞大神也亦名道返大神矣と有ハ此御功小依ハ根國底國の物の通ハ限の衢と衛護して御在一坐ハ謂ありけレバ上と等ハ趣ありて其國即地胎小在り證とハ成り又大枝詞ハ高山之末短山之末與佐久那太理ハ落多支都速川能瀬坐須田田瀬織津比咩止云神大海原尔持出奈如此持出往波荒鹽乃鹽乃八百道乃八鹽道之鹽乃八百會尔座須速開都此咩止云神持可可吞氏如此以可可吞氏波氣吹戸坐須氣吹戸主止云神根國底之國尔氣吹放氏如此以氣吹放

波根國底之國亦坐速佐須良比咩登云神持佐須良比
失_兵之有_山下_川川下_海海と持下_り海潮其_下
黄泉根國亦流離_る行_く次第を以_ても今_も地下
根底亦在_る國亦事甚_く限無_く亦_も有_けれ此大
神の入坐_り以降_に断離_れて月國ハ大虚亦_も巡_り初_に
加_ると云説_は古文亦_も徴_す又_も立つ所無_き者_ぞ
と_ハ服部中_庸が三大考_ハ月讀命_の所_知者_ヲ夜食國
ハ即_チ泉國_ノ事_{アリ}泉_ハ根國底國_トも云_て大地
の下方_ニ在_る事_次ハ圖_の如_ク一_ノ諸_其泉_ハ即是_月
御名_の讀_と同_ト思_ふ可_しと云_り延_て後_ハ
ハ月_豫美_國と云_ふ新_國名_トハ_も出_來れ_ル何_れ
也_ト杜_撰の_大古_ノ故_其月_國ハ_も天_地初_に判_れ
意_ハ亦_も非_ず者_ぞ故_其月_國ハ_も天_地初_に判_れ

ハ_も一_ノ程_{ヨリ}出_來れ_ル國_常立_尊を國_底立_尊と申
奉_らハ_も此_大地_を離_れて天_雲の退_方の方_ニ別_ニ國_を
建_てせ_し御_在し坐_けり證_{あり}又_も國_独立_尊と申_す御_名
の渡_りせ給_へハ_も此_大地_を割_て國_を立_給へり證
是_{あり}然_して大_地の外_ニ別_ニ國_有る事_ハも其_月
國_を除_て天_地の何_れの處_ニハ_も爲_む然_れ其_已判
れ_{たり}太古_{ヨリ}て此_大地_亦附_屬て大_空を巡_ら
ふ國_{あり}故_ハ月_國云_ふ名_ハ本_{ヨリ}有_ける_{あり}皆
古_事記_三貴_子御_事依_の段_ハ次_詔月_讀命_汝命_者所_知
夜_之食_國兵_事依_也と所_見たる此_ハ素_戔鳴_尊と同_神

ふ渡りて給ふ御事あり今云限ふ非りけるを其始此
天下を所知り看せと事依り奉りて給へる御時ふ合
せて其月國とも所知看させ給へり御事の無くして
ハ斯り御命詔あごとを誰りハ杜撰出らり可き其始
り月夜見尊と申奉る御名の御在り坐けし事ハ四神
出生章第六十一一書あり保食神の件かても知り此
傳四百九十六丁ハ引り御牧望月大伴神社記ふも月夜見
尊即青海原袁治食須時龍馬ル葉給互四方乃國中河
三溪ニル至迄不殘睨巡給支と云文も有と思ふ當
昔己ハ其御名あり御在り坐たりけり若て出雲風

王記ハ島根郡千酌驛郡家東北一十九里一百八十歩
伊佐奈杵命御子都久豆美命此處坐然則可謂都久豆
美而今人猶千酌號耳と有と紹運録神系圖等ハ月夜
見尊御子島根見傳命と系と係たり事思合す可し此も
未其國ハ赴給ハじり以前都久豆美ハ月津持命と申す御名
を以て申せりしあり又神名式ハ謂ゆる意宇郡賣
豆紀神社を三代實録ハハ女月神と作ら其月神の
后神あり謂と聞ゆれば此も奇稻田姬命あごと
ハ御在り坐つめ三大考ハ月讀命ハ月ハ非ず月
の中ハ坐神あり事天照太御神の日の内ハ坐すすと

同ト其夜食國と云と唯月ハ夜を照し給ふ事との
見てハ食國と云云ハ叶ハす必別ハ其國無クハ有ベ
ク^クと云ハ然ル事^ハ其月國^ハ夜之食國ハ
ハ有と己ク伊弉諾大神の此天下と共ハ月國をも合
せて共ハ事依リ授け聞え^ハ給へ^ハ給ふ^ハ有け^レれ
バ此を根國底國とハ云べ^ク又黄泉國と一ハ
本^ハ爲^レ此^ハ理^ハ有^レけ^レ右^ハの如^クニ所
給へ^リと云と心行ず思ふ^ハ人^ハも有^レあ^レも其天
照太御神の御事^ハ汝命者所知高天原^ハ事依^レ而賜
也^ハ有^レあ^レハ此頭國^ハ兼^レ所知^ハ者^ハ所以^ハ有^レ事
己^ハ小^ハ條^ハ注^ハ奉^レ如^ク又^ハ此素戔嗚大神^ハ此頭
國^ハ事依^レ奉^レ給^レハ^ハ上^ハ月國^ハ兼^レ授^レハ^ハ月國
世^ハ給^レヘ^リ事^ハ天^ハ日^ハ此^ハ大地^ハハ^ハ附^レ屬^ハ又^ハ大地^ハハ^ハ月國

の相從^ハハ^ハ同^ハ神^ハ然^レ素戔嗚大神始^リ所^ハ思^ハん
理^ハハ^ハ有^レけ^レ立^レ世^ハ御^ハ在^リ坐^レけ^レ根國底國へ入^リ御^ハ在^リ坐^レけ^レ其
國^ハハ^ハ古^ハ事^ハ記^ハ故^ハ号^ハ其^ハ伊^ハ弉^ハ那^ハ美^ハ命^ハ謂^ハ黄^ハ泉^ハ津^ハ大^ハ神^ハ
と^ハ所^ハ見^ハた^ハ此^ハ御^ハ母^ハ伊^ハ弉^ハ冊^ハ大^ハ神^ハの^ハ所^ハ知^ハ者^ハ御^ハ國^ハハ^ハ
事^ハ右^ハ小^ハ引^ハ鎮^ハ火^ハ祭^ハ詞^ハ吾^ハ波^ハ下^ハ津^ハ國^ハ所^ハ知^ハ者^ハ白^ハ兵^ハ
有^レ御^ハ言^ハふ^レ著^ハ明^ハけ^レけ^レ此^ハ素^ハ戔^ハ嗚^ハ大^ハ神^ハの^ハ入
坐^ハた^ハ此^ハバ^ハと^ハ其^ハ國^ハを^ハ所^ハ知^ハ者^ハと^ハ云^ハ事^ハハ^ハ本^ハより^ハ有^レベ
ク^ハず^ハあ^レび^ハ有^レける^ハと^ハ其^ハ上^ハ大^ハ袞^ハ詞^ハ根^ハ國^ハ底^ハ之^ハ國^ハ
坐^ハ速^ハ佐^ハ須^ハ良^ハ比^ハ咩^ハ止^ハ云^ハ神^ハと^ハ見^ハえ^レ御^ハ鎮^ハ座^ハ傳^ハ記^ハ尾^ハ崎^ハ神^ハ社
記^ハ等^ハ小^ハ其^ハ神^ハと^ハ也^ハ此^ハ大^ハ神^ハの^ハ和^ハ魂^ハと^ハ且^ハ土^ハ藏^ハ靈^ハ貴^ハと

一も云々ハ黄泉津持の義あるを思ふ其本と坐す
素戔嗚大神を除て殊小靈貴とハ称奉り可くざり
理あり此を以て按ふ其國ハ一も右の大神等ハ更
あり泉津醜女又ハ泉津日狭女あども其從奉り神す
了小皆女神ありけり此素戔嗚大神一度ハ御母神
小觀元奉り小根國ハ入御在坐たり一も其御
行方ハハハ此を離れて彼御父大神の汝命者所知夜之
食國兵事依也と有ら御言の任ハ真空行月國ハ
行著せ給へり山こり有けり万葉六二十山葉左
佐良楳壯子天原門度光見良久之好裳と有て右一首

歌或云月別名曰佐散良衣壯士也緣此辭作此歌見
元たる此ハ月別名あるハ非ず即月神の御名ある
ハ此國土より流離ハ給ひて其國ハ御在
坐けるを以て左散良楳壯子とハ申奉れるあり然
時ハ素戔嗚尊と申すハ其根堅洲國ハ御在坐す迄
ハ御名月夜見尊と申奉るハ其ハ夜之食國ハ御在
坐す即其大神と御在坐す御名ハ渡り給
へりける諸其御名の義ハ傳ハ卷五十八丁九十八丁
義ありと云々奉り如く縣居翁説ハ月夜持の
靈雲尊と申奉れ即大書持の義あり對へり御名
大日女命と申す其御光及ふ限と書と云ひ其

御光の及ばぬ處を夜と云ふ夜之食國ハ本御神の御
光の及ばぬ國ありと云う其如く又月夜持と申し
て即夜之食國と有たせ故此大神の月夜現尊と御在
御在し坐り謂ありけり故此大神の月夜現尊と御在
し坐り實ハ幽深に致有り御事ありて炊ありと也
あり理有り御事ありけり然りハ彼ニ柱御祖神の吾
己生大八洲國及山川草木何不生天下之主者歟詔
給ひて御子を生奉りて給ひけり天照太神ハ此
光華明彩ありて六合の内ハ照徹りて給ふ大御徳を
む大座坐けりて以て高天原を所知者なり奉りて給
ひ次ハ此大神ハ此大地と夜之食國也と事依り給
はりけり也右の所以ハ由りけり此國を所知

食心事ハ御心ハ思ひ寄せ給はざりけり故ハ御
父大神ハ神逐ハけりて奉給へりけり其より天上
ハ參向ハせ給ひ天照太神の御誓の御事御在しけり
ハ御兒吾勝尊を生奉りて給へり此即ニ大神の皇太
子と御在し坐り天下國土を所知者なり御事ありてニ柱
御祖神の何不坐天下之主者歟と思ひ入り其大神
を生給へり御事の結と成りけり若し天照太神ハ吾
兒と詔給ひ此大神ハ吾兒と詔給ひて全くニ大神
の大御正統ありて渡りて給へり故ハ御天降の時
御垂玉ハ天照太神ハ八咫鏡素戔鳴尊ハ草薙劔と

も授奉りて給へり御事を始とて天照太神ハ一も
高天原より照臨すも御在り坐て此大地の晝と持た
せ給ひ月夜見尊ハ一も夜之食國より御照し御在り
坐て此大地の夜と持たせ御在り坐ふも其始終の神
量共小皆くも小事打合て世中を相有りて御在り坐
す理ありし靈ととも奇なりとも云へば得ぬ云ひ方無
御事共ハ一渡りて給へりけり此素戔嗚大神の夜之
食國と所知者ハ御在
一坐ありし斯り奇異あり御事ありしが其明らめ奉り根
元と一も其御生坐り始り取り御事依りの御事より
係り瑞珠盟約の御事ハ本著りて説奉りハ非ざりて
ハ浮きなり所あり出来り事ありけれバ予ハ贅言と
て煩りし思故其月國ハ一も万葉七十四小久方乃天照
ふ事分れ

月者神代尔加出及等六年者經去作十一十小久方天
光月隱去何名副妹徳十七十七小比左可多能安麻豆
流月者見都禮村母安我母布伊母尔安波奴許呂可毛
と有ハ更あり四十四十七三空去月之光二六十二
ハ小天尔座月讀壯子幣者將爲今夜乃長者五百夜繼
許曾ある穎の數多有り月也即天中の一象物あり然れ
ハ地胎と偈潛りて入る黄泉ありて有るハ事ハ已ハ
四神出生章第六一書ハ其國の汚穢ハ一状を見行ハ一坐て時
伊弉諾尊驚之曰吾不意到於不須也凶目汚穢之國矣
乃急走迴歸と見元又伊弉諾尊既還乃追悔之曰吾前

到於不須也凶目汚穢之處故當滌去吾身之濁穢略
見元又其第十書云但親見泉國此既不祥故欲濯
除其穢惡也其有て其國を見行ハ御在坐ける
事を甚く不祥として忌嫌ハせ給へり月若其黄
泉ありし夜ハ其黄泉の全体を見ろと云へ
如何ハ忌ハし事ありすや且上百三十一注ルガ
如ク齋明天皇御紀云屋社ハ狗ノ人骨を嚙置リ
ガ天子崩兆ニ成リ又出雲風土記ハ謂ゆる黄泉之坂
黄泉之穴の有る腦磯を夢見ハ必ハ死ハ由ル
リ此等ハ其國ハ通ハ泉門ありク斯ク驗有り況ハ其

全形を見ルハ猶幾許ハ勝リ穢ハハ忌忌ハハ
事ありハ然ハ往古ハ月を見ル身亡ル
例を聞ハレハ猶月ハ月黄泉ハ黄泉ハ各格別あり
事ト明ル可ク其上黄泉ハ紀記ハ所見ハルガ
如ク有ゆる邪神毒鬼の輻湊ハ居ル城あり故ハ道
饗祭ハ其を饗ハ過めて元ハ泉門ハ逐入ル神事あり
大祓ハ穢惡不浄を彼國ハ流シ却ル神事あり故ハ
山川海ニ次下ハ根底國ハ降流由あり月ハ黄
泉ありと云ハ東ハ行く者と西ハ逐ハ北ハ逃ル者
と南ハ迫ル者如クハ甚ク方違ハル事ハ多

在_レか_レめ 且万葉十三卷小天橋文長雲鴨高山文高雲
鴨月夜見乃持有越水伊取來而公奉而越得
之牟物ハ若返_レ事_レ得_レ物_レと云意_レ有_レ得
何_レが黄泉の水と以て老人の若_レ返_レ事ハ有_レ得
玉_レ影_レ移_レ水_レ取_レ事_レ世_レ在_レ彼_レ愈
泉_レ之_レ靈_レ類_レ汚穢_レ事_レ爲_レ古_レ月
と黄泉_レ別_レけ_レ然_レ事_レ非_レ如何
カ爲_レ右_レの如_レ月ハ黄泉_レ非_レ故_レ天_レ日_レ相_レ並_レ
て物の美_レ例_レ云_レ事_レ古_レの常_レ行_レ齋
 内親王奉入詞小皇御孫之尊 天地日月止其_レ常_レ啓
御座_レ志_レ武_レ止_レ御杖_レ代_レ進_レ給_レ出_レ雲
 神賀詞小麻蕪比乃太御鏡乃面 意志波留志_レ天_レ見_レ行
 事能己登久明御神能 大八島國_レ天地日月_レ等_レ共_レ安

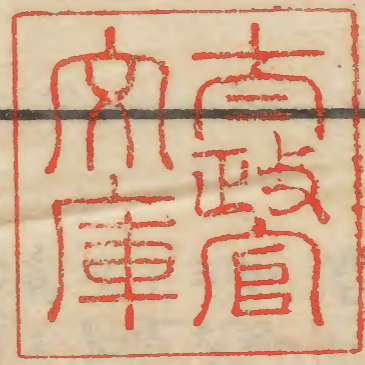
△二平小天地月與
 共滿持行神乃
 御面跡次交中乃
 水門從

久平久知行 事能 志太米 止 中臣壽詞小與天地日月
 共照 志良 明 志良 御坐事 本末不頌 茨槍乃中執持_レ奉_レ仕
 留 有_レ始_レ歌_レも万葉_レ六_レ十五_レ小天地之遠我
 如日月之長我如臨照難波乃宮尔和期大王國所知良
 之十三 丁五 小百磯城之大宮人者天地與日月共萬代尔
 母我十九 九三十 小手拱而事無御妣代等天地等日月等
 登聞仁萬世尔記續年曾あ_レ有_レ天地_レ共_レ小長_レ遠
 子例小如此_レ日月_レ相_レ並_レ云_レ事神代_レ然
 力又其二 二十 小望月乃滿波之許武跡天下 一云 四方
 之人乃大船之思憑而天水仰而待尔又 三十 鏡成雖見

不歎三五月之益目類添九三十四望月之滿有面輪二
十三八丁如天仰而見乍雖恐思憑而何時可聞曰足
座而十五月之多田波思家武登る也有此等ハ發語
小置るあれども皆物の満足ハ美好ハ事云々けり
右等ハ事共此月と黄泉を爲ハ時ハ早ハ美好良事
を述るが物ハ甚忌ハハ物と引出たハ其云々
ハヤ有ハ但其四四丁月讀之光ニ來益又其和歌ハ
月讀之光者清雖照有十五五丁月余美能比可里辛伎
欲美又十一丁月余美乃比可里辛伎欲見由布奈藝本
あハ直ハ月ハ事ハ然詠ハ其六八丁天ハ座月讀

壯子七三十三空去月讀壯士十三八丁月夜見乃持
有越木あど有る如月と所知者神名あどハ異りて天ハ月
を其神名を以て云ふて海ハ事と綿津見あど其を知
す神名を借ハ云々同ハ例あり此月讀ハ事と意ハ
ハ心得ハ時ハ三大考ハ謂ハる國名ハ黄泉ハ神名ハ
夜見ハ一ハ混ハる月即黄泉ありと云如ハ僻説
を以て後生を欺ハる者ありハ己ハ注セハ
如ク黄泉ハ大地ハ胎内ハ在ハる域ハる故ハ下津國
ハ云ハ又根國底國あども云ハ其月夜見尊ハ所知
食ハ夜之食國ハ大地ハ附屬ハる物ハ云ハる

安政六己未年四月十八日始同五月十一日成



明治七年七月廿三日叔全之管政文

